埼玉大学紀要　教育学部，66(2)：195－207（2017）

5年一貫看護師養成課程における生徒・学生の職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティの形成過程

三津橋　佳　子　　埼玉県立常盤高等学校
関　　由起子　　埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：職業的アイデンティティ　青年期のアイデンティティ　看護教育　５年一貫養成課程

１．はじめに

高等学校には普通教科を主とする学科と専門教育（職業教育）と主とする学科（農業・工業・商業・水産・家庭・看護・情報・福祉）がある。高等学校看護（5年一貫養成課程）は、専門学科（職業教育）を主とする看護学科であり、高等学校教育と看護師養成教育を同時に行うため、５年間の教育により国家試験受験資格を取得できる特徴を持つ。2015年の文部科学省の報告によると全国で高等学校看護は76校、１学年の定員は4135名（文部科学省、2016）であり、高等学校等の学習指導要領では、職業教育について、「将来のスペシャリストの育成のため、専門性の基礎・基本を一層重視するとともに、専門分野に関する知識と技術の定着をはかること、実社会や職業とのかかわりを通じて、職業観、規範意識、コミュニケーション能力等に根差した実践力を身に付けること」と記載されている。その中の職業観について、「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識である」また、「人が職業そして職業を通じての生き方を選択するに当たっての基準となり、また選択した職業によりよく適応するための基盤ともなるべきものである」（国立教育政策研究所生徒指導センター、2002）と説明されている。この職業観を内包する概念に青年期におけるアイデンティティがある。アイデンティティとはErik H Eriksonが提唱した概念であり、下山（1986）は青年期におけるアイデンティティ形成の社会的役割の獲得において中心的位置を占めるのが職業決定であることを示唆した。岡本と松下（1994）は「職業的アイデンティティとは自分らしさの確立と深くかかわりながら、職業に関心をもち働きかけることによって達成されていく」としており、職業的アイデンティティの形成は、青年期におけるアイデンティティ形成に重要であり、その形成を促すことが社会との関係の中で自己を統合し自分の生き方を見つけ、職業観の育成に関与すると思われる。

高等学校看護（5年一貫養成課程）教育においては、以前から強い使命感や高い勤労意欲をもった生徒を輩出し医療現場や地域社会からの高い評価が聞かれる一方で、５年間のモチベーション維持・継続が困難な生徒の存在が報告されている（文部科学省、2008）。５年一貫生における職業的アイデンティティ形成の先行研究では、職業的アイデンティティは学年進行に伴って低下し、卒業年次には再び上昇すること（上田ら、2010）、また高校過程から段階的に行われている臨地実習での体験を通して、看護に関心を持つことができ、職業的同一性が認識され、内発的動機づけが維持されること（新谷ら、2006）、また早期から看護職を決定した衛生看護科生徒は早期完了が多いこと（中西・水野ら、1985；中西、1989；松下・木村、1993）が報告されている。三津橋と関（2016）は、５年一貫生を対象に職業的同一性テストを実施した結果、現在の職業選択意識として、看護職に対して迷いや疑問を示す“看護職への揺らぎと迷い”、看護学生として学ぶこ

とに自信があり看護職に対して傾倒している“看護職への自信と傾倒”、資格取得に対して意欲的に考えているかどうかの“看護職を超えた専門職志向”の３つの下位尺度で構成されていることを明らかにした。また看護職への揺らぎと迷いを学年間で比較したところ、１年生が最も低く、２年生で有意に上昇し、再び３年生で下がり、４年生で上昇し、５年生には１年生ほどではないが再度下降するＭ字型であった。つまり５年間で看護職を目指す上での気持ちの落ち込みや上向き体験を経て、自身の職業的アイデンティティの形成が促されると考えられる。一方、看護職への自信と傾倒では有意な学年差が認められず、看護職に就くことに迷いや揺らぎが生じても、看護職への傾倒は維持していることも明らかになった。

５年一貫生以外の他課程の看護学生においても、教育と職業的アイデンティティの関連や職業的アイデンティティの形成状況は多数報告されており、大部分の看護学生は自分なりの考え方、価値観、人生観をもち、職業選択やキャリア発達が強く関連する一方で、アイデンティティの確立につまずき、挫折してしまうといった危機に直面し、アイデンティティ拡散の状態が現れやすく、問い直しを必要としていた（松下・木村、1993・1998；風岡、2005）。また、多くの看護学生が青年期であることから、青年期のアイデンティティとの関連も報告されている（上山、2009;関口、2012）。つまり、15歳で職業を選択し、高校教育と看護専門教育を受ける５年一貫生は、自我と職業のアイデンティティを発達させるという２つの課題を有しており、職業的アイデンティティとともに青年期のアイデンティティに関する形成を促すことは教育上不可欠である。

そのため本研究は、中学卒業時に看護師という職業選択をした５年一貫生を対象に、職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティ形成の状況を把握することを、さらにそれらが生徒・学生の背景となる基本属性とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

２．方法

2-1. 用語の定義

(1) 職業的アイデンティティ

青年期におけるアイデンティティ形成の上で職業決定は最も重量な発達課題である。この青年期における職業的アイデンティティを、岡本と松下（1994）は「職業的アイデンティティとは自分らしさの確立と深くかかわりながら、職業に関心をもち働きかけることによって達成されていく」としている。ここでは、職業的アイデンティティを看護に特化したアイデンティティとし、看護職を選択し勉強していく自分に納得し、将来看護職に就く自分と今の自分をイコールで結ぶ感覚（小沢、2002）とする。

(2) 青年期のアイデンティティ

鑪（2002）は、青年期は社会的に成人である証明として職業を持つ以前に、社会的な特定の役割をとり、自ら実験をする時期であるとしている。そこで、この時期に一体自分は、これまでどんな人間だったのか、自分はどこから来て、どこへ行こうとしているのか、また自分を他者との関係の中で自分は自分であるという認識すること、つまり青年期のアイデンティティとは、青年期において、時間的にも空間的にも自分と自分をイコールで結ぶ感覚（小沢2002）とする。

2-2. 調査対象者と調査方法

Ａ県高等学校看護（5年一貫養成課程）に在籍する１年生から５年生、全391名を対象とし、平

成26年３月10日～３月24日に、各担任を通して無記名自記式調査票の配布および回収を行った。

2-3. 調査項目

(1) 職業的アイデンティティ尺度

波多野と小野寺（1993）は、看護師と看護学生を対象としたアイデンティティを測定する尺度を開発した。本研究ではこの尺度を職業的アイデンティティ尺度とした。各尺度の項目は、４つの下位尺度（職業人としての自己向上・職業人としての自尊感情（肯定的イメージ）・職業的自己関与・職業への肯定的イメージ）で構成され、計12項目である。配点の方法は５段階評定法（5：非常によくあてはまる、4：ややあてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：全くあてはまらない）である。本研究では、この尺度の合計点（range12～60）を職業的アイデンティティの形成状況とし、得点の高い方がアイデンティティの形成状況が高いことを示す。

(2) 青年期のアイデンティティ尺度

下山（1992）は日本の大学生のモラトリアム心理とアイデンティティの確立度との関連を検討するために、アイデンティティ基礎とアイデンティティ確立の２つに分けた尺度を開発した。アイデンティティの基礎尺度は、アイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず、不安や孤独におそわれる気持ちを反映した内容であり、アイデンティティの確立尺度は、自己の主体性や自己の信頼が形成されていることを表す項目である。これは10因子、計20項目からなり、配点の方法は４段階評定法（4：よくあてはまる、3：どちらかといえばあてはまる、2：どちらかといえばあてはまらない、1：全くあてはまらない）である。本研究ではこの尺度の合計点（range20～80）を青年期のアイデンティティ形成状況とし、得点の高い方が青年期のアイデンティティの形成状況が高いことを示す。

(3) 職業選択意識・傾向尺度

職業選択意識・傾向尺度は、三津橋と関（2016）がMarcia.J.E.のアイデンティティ・ステイタス論をもとにした職業的同一性地位テスト（松下・木村、1993）を５年一貫生に実施した結果、得られたものを用いる。その尺度は看護職への揺らぎと迷い（7項目）、看護職への自信と傾倒（6項目）、看護職を超えた資格志向（3項目）からなり、配点の方法は５段階評定法（5：非常によくあてはまる、4：ややあてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：全くあてはまらない）である。看護職への揺らぎと迷いの合計点（range7～35）、看護職への自信と傾倒の合計点（range6～30）、「看護職を超えた資格志向」の合計点（range1～15）を各尺度として用い、得点の高い方がそれぞれの意識や傾向が強いことを示す。

(4) 生徒・学生の基本属性

基本属性は、松下と木村（1993）の研究報告から職業同一性形成に関連があるとされた項目を用いた。その内訳は以下の10項目である。

①学年：現在の所属学年１～５学年を尋ねた。

②看護職決定時期：小学校３年生までに決めたか、小学校４年生から中学校２年生までに決めたか、中学校３年生の高校入学直前に決めたかを尋ねた。

③受験決定時期：中学校３年生の直前に決めたのか、それ以前に決めたのかを尋ねた。

④受験校の希望順位：第一希望であったか、他校を諦めて受験したのかを尋ねた。

⑤受験決定者：自分で決めたのか、自分以外の他者が決めたのかを尋ねた。

⑥家族や親類に看護職、⑦身近な死の経験、⑧自分の病気や入院経験、⑨家族の入院、⑩祖父母

との同居については、それぞれ、ある・なしの２択で尋ねた。性別に関しては男子が少人数であることから、個人を特定しないよう配慮する理由で問わなかった。

2-4. データ分析方法

(1) 職業的アイデンティティ尺度12項目、青年期のアイデンティティ尺度20項目、職業選択意識・傾向尺度（看護職への揺らぎと迷い７項目、看護職への自信と傾倒６項目、看護職を超えた資格志向３項目）のそれぞれの得点分布を確認し、Cronbschのα係数を算出し、その内的整合性を確認した後、各尺度間のピアソンの積率相関係数を求め、その関係性を検証した。

(2) 職業的アイデンティティ尺度と青年期のアイデンティティ尺度の関連要因を検討するために、それぞれの尺度を従属変数、基本属性を独立変数とし、単変量解析ではt検定または一元配置の分散分析を、多変量解析では独立変数の一括投入の分散分析を行った。

(3) 職業的アイデンティティ尺度、青年期のアイデンティティ尺度、職業選択意識・傾向尺度（看護職への揺らぎと迷い、看護職への自信と傾倒、看護職を超えた資格志向）のそれぞれの学年差を多重比較（Turky法）にて検討した。

分析には、統計解析用ソフトウエアIBM SPSS Statistics version22を使用し、有意水準は５％以下とした。

2-5. 倫理的配慮

本研究の調査時の手続きとして調査の趣旨、方法及び倫理的配慮を学校長に説明し、職員会議で許可を得た。また、調査前に研究の目的と倫理的配慮（対象者に調査の参加は強制ではないこと、回答は自分の意志で決めることができること、個人の成績評価には一切関係しないことや、回答したくない場合はしなくてもいいこと、それによる不利益はないこと、また調査用紙は研究目的のみに使用し、すべて番号で取扱いデータとして処理し、個人が特定されないこと）について文書で説明し、了承を得た。

３．結果

3-1. 調査対象者の概要

対象者391名のうち、368人より回答があった（回収率94.1％）。無回答と信頼性の乏しい回答を除き、最終有効回答数は357名（1年生77名、２年生70名、３年生68名、４年生72名、５年生70名）、有効回答率は91.3％であった（表１）。他の基本属性として特徴的なことは、看護職決定時期については、小学校３年生までの早期に決定した者が約30％、身近な人の死や家族の入院経験のある者が約70％、本校を第一志望で入学した者が約90％であった。

3-2. 職業的アイデンティティ、青年期のアイデンティティ、職業選択意識・傾向の概要

職業的アイデンティティ、青年期のアイデンティティ、看護職への揺らぎと迷い、看護職への自信と傾倒、看護職を超えた資格志向について得点分布を確認した。それぞれの尺度ごとのCronbschのα係数は、職業的アイデンティティで.887、青年期のアイデンティティで.852、看護職への揺らぎと迷いで.782、看護職への自信と傾倒で.781、看護職を超えた資格志向で.721であり信頼性が確認された。

更に尺度間の関係性を見ると（表２）、職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティは有意な相関を示した。また、職業選択意識・傾向３尺度との関係性は、職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティ共に、看護職への揺らぎと迷いと有意な負の相関、看護職への自信と傾倒および」看護職を超えた資格志向と有意な正の相関が見られた。

3-3. 職業的アイデンティティおよび青年期のアイデンティティに関連する要因の検討

多変量解析の結果によると（表３）、職業的アイデンティティに有意に関連する要因は、学年、看護職決定時期、受験決定者であった。学年差でみると、１年生（入学時）と５年生（卒業年）が他よりも有意に高い結果であった。また、小学校３年生までに看護師になることを決定した群が中学校３年生の直前で決定した群より有意に高く、受験校の決定を自分が行った群が、他者が決めた群よりも有意に高かった。青年期のアイデンティティに関連する要因を多変量解析の結果でみると、学年のみに有意な差がみられ、３年生および４年生に比べ、５年生が高くなっていた。

表１　基本属性と設問の回答別にみた数・割合（N=357）

		人数	%
学年	総数	357	100.0
	1年	77	21.6
	2年	70	19.6
	3年	68	19.0
	4年	72	20.2
	5年	70	19.6
看護職決定時期	総数	340	100.0
	小学校前～小３	104	30.6
	小４～中２	149	43.8
	中３	87	25.6
家族や親類に看護師	総数	356	100.0
	いる	131	36.8
	いない	225	63.2
身近な人の死の経験	総数	356	100.0
	ある	254	71.3
	ない	102	28.7
自分の病気や入院経験	総数	357	100.0
	ある	144	40.3
	ない	213	59.7
家族の入院経験	総数	356	100.0
	ある	274	77.0
	ない	82	23.0
祖父母との同居	総数	357	100.0
	ある	149	41.7
	ない	208	58.3
受験校の希望順位	総数	356	100.0
	第１希望	326	91.6
	他をあきらめた	30	8.4
受験決定者	総数	356	100.0
	自分で決めた	232	65.0
	自分以外	125	35.0
受験決定時期	総数	355	100.0
	直前（中学校3年）	192	54.1
	それ以前	163	45.9

無回答を除いてパーセントを算出した。

表２　各尺度間の関係

	職業的アイデンティティ	青年期のアイデンティティ	看護職への揺らぎと迷い	看護職への自信と傾倒	看護職を越えた資格指向
職業的アイデンティティ	―	―	―	―	―
青年期のアイデンティティ	0.409**	―	―	―	―
看護職への揺らぎと迷い	-0.554**	-0.37**	―	―	―
看護職への自信と傾倒	0.528**	0.249**	-0.478**	―	―
看護職を越えた資格指向	0.288**	0.177**	-0.013**	0.181**	―

ピアソンの積率相関係数　**:p<0.01

表３　職業的アイデンティティ尺度と青年期のアイデンティティ尺度と生徒・学生の基本属性との関係

		職業的アイデンティティ尺度[c]				青年期のアイデンティティ尺度[d]			
				単変量[a]	多変量[b]			単変量[a]	多変量[b]
	人数	平均	標準偏差	F値/t値	F値	平均	標準偏差	F値/t値	F値
学年	357	41.9	7.45	#7.74**	9.92**	50.0	8.33	#4.22*	4.07**
1年	77	**44.9**	**6.61**			51.0	8.77		
2年	70	**40.4**	**6.59**			49.7	7.32		
3年	68	**42.1**	**5.75**			48.6	7.02		
4年	72	**38.8**	**8.16**			47.6	8.39		
5年	70	**43.2**	**8.36**			52.9	9.01		
看護職決定時期[e]	340	42.2	7.37	#16.33**	12.01**	50.0	8.30	#1.81	1.02
小学校前～小３	104	44.6	7.06			51.3	9.86		
小４～中２	149	42.5	6.92			49.5	7.63		
中３	87	38.8	7.26			49.2	7.23		
家族や親類に看護師	356	41.9	7.45	-0.11	0.00	**49.9**	**8.27**	-0.87	0.13
いる	131	41.9	7.411			**49.4**	**8.38**		
いない	225	41.9	7.50			**50.2**	**8.21**		
身近な人の死の経験	356	41.9	7.46	-0.22	0.69	50.0	8.34	1.54	1.10
ある	254	41.9	7.58			50.4	8.27		
ない	102	42.0	7.17			48.9	8.44		
自分の病気や入院経験	357	41.9	7.45	-0.88	2.63	50.0	8.33	-1.54	2.99
ある	144	41.5	7.64			49.1	9.07		
ない	213	42.2	7.31			50.6	7.76		
家族の入院経験	356	41.9	7.46	-0.08	0.08	50.0	8.34	-0.79	1.34
ある	274	41.9	7.65			49.8	8.53		
ない	82	42.0	6.81			50.6	7.67		
祖父母との同居	357	41.9	7.45	0.62	0.85	50.0	8.33	0.23	0.34
ある	149	42.2	7.36			50.1	8.47		
ない	208	41.7	7.52			49.9	8.24		
受験校の希望順位	356	41.9	7.46	4.68**	4.79	50.0	8.34	0.56	0.00
第１希望	326	42.5	7.17			50.1	8.38		
他をあきらめた	30	36.0	8.10			49.2	7.99		
受験決定者	356	41.9	7.45	5.67**	16.29**	50.0	8.33	1.98 *	3.04
自分で決めた	232	43.6	6.58			50.6	8.60		
自分以外	125	38.8	7.99			48.8	7.69		
受験決定時期	355	41.9	7.45	2.81**	0.73	50.0	8.35	1.06	0.15
直前（中学校3年）	192	40.9	7.65			49.5	8.24		
それ以前	163	43.1	7.05			50.5	8.48		

注）無回答は除いて分析を行った。　**：p<0.01　*：p<0.05
a：　#はF値を示す
b：　多変量解析は、すべての基本属性を一括投入した分散分析を行った
c：　職業的アイデンティティ（range12～60.高得点であるほどアイデンティティが形成していることを示す）
d：　青年期のアイデンティティ（range20～100.高得点であるほどアイデンティティが形成していることを示す）
e:　多重比較の結果,小学校前～小３>中３（p<0.001）,小学校前～小３>小４～中２（p<0.001）,小４～中2>中3（p<0.05）であった。

3-4. 職業的アイデンティティ、青年期のアイデンティティおよび職業選択意識・傾向の学年差の検討

職業的アイデンティティの学年間での平均点を分散分析した結果、１年生が最も高く、２年生には低下し、３年生では上昇し、４年生では再び低下し、５年生では再び上昇するW字型となった（図１）。青年期のアイデンティティの学年間での平均点を分散分析した結果、１年生から、２年生、３年生、４年生と順に低下し、５年生では最も上昇していた（図２）。職業選択意識・傾向の３尺度でそれぞれ学年間での平均点を分散分析した結果、看護職への揺らぎと迷いでは、１年生が最も低く、２年生では上昇し、３年生では低下し、４年生では再び上昇、５年生では低下するＭ字型を描いた（図３）。看護職への自信と傾倒では、学年間には有意な差がみられなかった。看護職を超えた資格志向では、１年生が最も高く、２年生、３年生、４年生、５年生と順に低下していた（図４）。これらで特徴的だったのは、職業的アイデンティティと看護職への揺らぎと迷いであり、その結果は相反していが、青年期アイデンティティとは連動していなかった。

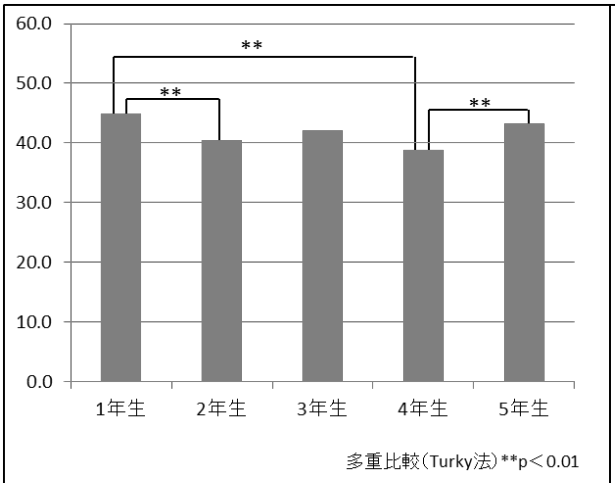

図１　学年別の職業的アイデンティティ

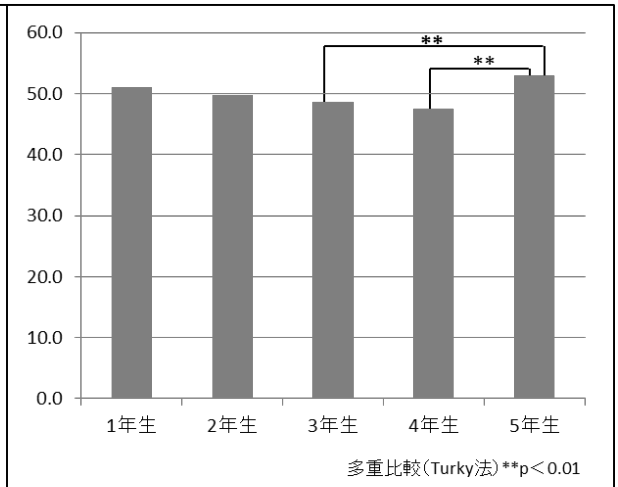

図２　学年別の青年期のアイデンティティ

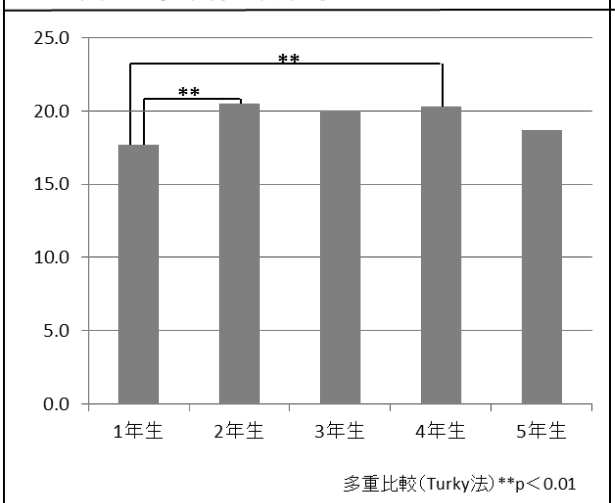

図３　学年別の看護職への揺らぎと迷い

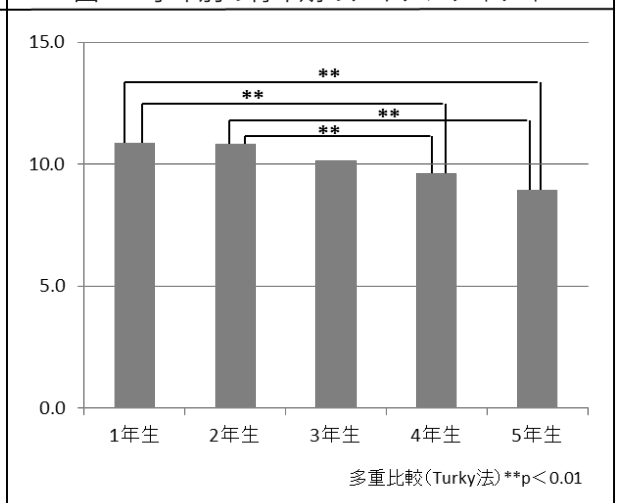

図４　学年別の看護職を超えた資格指向

４．考察

職業決定は青年期後期の最も重量な発達課題であり、乳幼児期以降、漸次形成されてきた多数の同一化群が青年期に社会的役割の獲得という形で統合される。つまり青年期におけるアイデンティティの形成は、自分にあった生き方の決定、つまり職業の決定が中心的位置を占める（東ら、2002)。Kroger（1947　榎本訳　2005）はアイデンティティの発達という著書において、職業上の意思決定が幼児期と青年期の間の空想期、暫定期、現実期という３つのステージががあり、これらの３つの時期に、いろいろな職業上の可能性を探ることと、アイデンティティに関連した情報を評価するための意思決定戦略の開発を助けることが、最も職業的アイデンティティの形成を促進すると紹介している。今回、研究対象とした５年一貫生の多くは、早期に看護職への憧れを抱き、看護職になることを決め入学し青年期を迎える。つまり職業的アイデンティティの意思決定に関する多種多様な選択肢を探索することが重要な時期に、看護職を選択した上で高校教育と専門教育が平行して行われる。このような５年一貫生の職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティがどのように関連し形成されているのか本研究では明らかにした。

4-1. 職業的アイデンティティの形成

職業的アイデンティティの学年差は、１年生が最も高く、２年生で大きく低下し、３年生で上昇し、４年生で最も大きく低下し、５年生の卒業時には１年生ほどではないが再び上昇するというW字型であった。この結果は、看護学生の職業的アイデンティティは入学時が最も高く、その後低下し、卒業時に再び上昇する結果（波多野・小野寺、1993；安藤・内海、1995；小藪ら、2007；上田ら、2010；関口、2012）と類似している。波多野と小野寺（1993）は、看護学生１年目は看護職への憧れが強い「ロマンチックな職業の憧れの段階」であり、その後専門教育や臨地実習などを経験することで「現実を知って失望する段階」、そして「職業的同一性を確立し、安定する段階」という３つの段階があることを報告している。５年一貫生においても、中学卒業時には看護職を選択するという看護師への強い憧れの時期、入学後の現実を知り失望する看護職への迷いの時期、そして卒業時の職業的アイデンティティ再形成の時期が見られ、先行研究を支持する結果となった。

５年一貫生の職業選択意識・傾向の看護職への揺らぎと迷いは、１年生が最も低く、２年生で上昇し、３年生で再度低下し、４年生で上昇、５年生では低下するというM字型であった。この結果は職業的アイデンティティの学年差のW字型と相反しており、この２つの尺度は負の相関関係を示していた。一方で、看護職への自信と傾倒と職業的アイデンティティとにも高い相関があるが、学年差には連動していなかった。つまり職業的アイデンティティ形成において、看護職への傾倒や憧れよりも、看護職に対しての揺らぎや迷いなどのネガティブな思いが変動因子になると推察できた。

職業的アイデンティティは看護師のイメージと関連があり、その看護師のイメージは３年課程看護学生では１年生から２年生にかけて低下し（江口・寺澤、2006；江口ら、2011）、職業環境イメージのネガティブ化や看護職の魅力の低下も見られることが明らかになっている（若林ら、1990；室津ら、2014）。しかし、看護職を目指すことへの揺らぎが、後に職業的アイデンティティ形成を促し（落合・堤、1997；合田ら、2011）、アイデンティティの安定状態につながることも報告されている。また江口と寺澤（2006）は、看護師イメージ得点が学年が進行するにつれて低下したのは、看護師としての自己像を意識し、憧れや一般的な職業イメージとしての看護師イメージではなく、専門職業人を目指す自己像を意識したことによる影響であると報告している。職業的アイデンティティの形成過程おける中心的テーマについて、山内ら（2009）は自分に向いているのか、自分にできるのかという看護職としての自分探しであるとも述べており、看護学生は看護職への不安や揺らぎの中でも、専門職者として自覚し、また自分と看護職と折り合いとつけながら職業的アイデンティティを形成していると考えられる。本研究の５年一貫生においても、看護職への揺らぎを何度も繰り返しながら、看護職を選択し勉強していく自分に納得し、将来看護職に就く自分と今の自分をイコールで結ぶ感覚を得て、専門職業人としての職業的アイデンティティを形成していくことが明らかになった。

また、５年間で一度低下した職業的アイデンティティが卒業時に再び上昇した一要因として、就職活動を経て卒業後の進路先を決定したり、看護師国家試験を受験したりすることが考えられる。就職活動などにまつわる問題が、自己の内面を見つめなおし、アイデンティティを形成していく過程に影響を与えることも報告されており（森本、2008）、この５年生での職業に関する現実な情報や活動が、より現実的な安定した職業アイデンティティの形成につながると思われる。

4-2. 青年期のアイデンティティ形成

青年期のアイデンティティの学年差は、１年生から４年生まで順に低くなり、５年生で最も上昇していた。下山（1992）は同様の青年期のアイデンティティ尺度で大学２年生と４年生を比較したところ、４年生の方が高く、青年期が終わりに近づくにつれて、アイデンティティが確立されていくことを報告しており、本研究はこの報告を支持した結果となった。職業発達や成熟度が高い者や職業に価値を置く（重視する）者は個人的アイデンティティも高いとの報告もある（宮下・爲川、1991；前田、2009）。本研究結果でも、職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティが有意な相関関係を示すという同様の結果が認められた。

さらに、青年期のアイデンティティと看護職への自信と傾倒の関連では正の相関、看護職への揺らぎと迷いでは負の相関が認められた。つまり５年一貫生において、看護という職業に価値を多く置く、つまり看護職への傾倒が高いほどアイデンティティも高く示された。一方で、職業へのネガティブな思いが拡散状況となり、アイデンティティ形成を阻害する因子になった可能性もある。この「拡散」の構成概念を下山（1992）は、職業決定を行う意思はあるものの、現実的な職業決定ができず職業選択の方向性が拡散し、心理的に不安定になっている状況であるとし、青年期アイデンティティ尺度とモラトリアム尺度との関連の調査では拡散と負の関連があったことを報告している。15歳で看護職を選択し入学したが、２年、３年、４年と看護を勉強し現実を知ることで揺らぎや迷いが生じ、看護職に就くという決定課題に対応できずに不安定な状況（モラトリアム状態）に陥るが、この状況を経た５年生においては、看護職に就くことの社会的重要性を意識でき、主体的に現実的に取り組むことによって、卒業時には青年期のアイデンティティが形成されたと考えられる。また、青年期のアイデンティティが形成するとされている一般の高校生や大学生に比べ（谷、2001）、５年一貫生は入学後から青年期のアイデンティティと職業的アイデンティティが同時に形成されるため、年齢とともに職業との関連も強く影響を受けやすい。看護学生における調査においても、職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティとの関連が報告（上山、2009；関口、2012）されていることから、この結果は看護学生全体にも共通する傾向ともいえる。これらの比較研究が今後必要と思われる。

4-3. 生徒・学生の基本属性とアイデンティティ形成の関連

本研究の結果から、早期に看護職を決定した群と自分の意思で入学した群が職業的アイデンティティを形成していたことが明らかになった。また、これらの群が職業に対しての揺らぎや迷いが少なく、看護職に対しての自信と傾倒が強かった。これらの結果は、医療系大学生の進路決定のプロセスにおいて早期決定型が明確な職業イメージを持ち、また主体的な決定を行うことが職業的アイデンティティを高めるという結果（本多・落合、2006）や、早い時期での看護職選択理由は自己実現が多いという結果（竹本、2008）を支持した。また、山田（2008）は、大学生においてアイデンティティが成熟している群は、進路決定を進める中で自己の積極的関与が高く、自分の考えや方向性などの主体性を重視していることを明らかにしている。本結果からも、自分の意思で看護職や入学を決めた群が看護職のイメージを明確に持ち続け、自分の進路に対し積極的に関与できたと推察できる。そのことが看護職への揺らぎや迷いを少なくし、また看護職への自信と傾倒を持ち続けることに関与し、アイデンティティの形成を促したのだと思われる。

4-4. 今後の課題

本研究では、中学校卒業時から高校教育と看護専門教育が同時に行われる５年一貫生にとって、学校教育上、職業的アイデンティティ形成を促す具体的要因については明らかにできていない。今後は、５年一貫教育において、どのような要素が職業的アイデンティティ形成を促すのかを明らかかする必要がある。

５．結論

高等学校看護５年一貫生に職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティの形成状況を把握するために、生徒・学生の基本属性との関連や尺度間の関連を検討した結果、以下のことが明らかになった。

１．職業的アイデンティティを学年間（5学年）で比較したところ、１年生が最も高く、２年生で有意に低下し、再び３年生で上昇し、４年生で低下し、５年生には１年生ほどではないが再度上昇するW字型であった。これは看護職への揺らぎと迷いと相反して、負の相関関係も示したことから、職業的アイデンティティ形成に看護職の揺らぎや迷いのネガティブな思いが大きく影響することが明らかになった。また５年間で何度か揺らぎを経験することで、自身の職業的アイデンティティの形成が促されたと推察された。

２．青年期のアイデンティティでは、１年生が高く、その後、２年、３年、４年と下降し、５年生では最も上昇した。途中学年で低下が見られたが、卒業時に最もアイデンティティが形成されており、就職等を迎える社会人としてスタートする時期に、青年期のアイデンティティが形成されていることが確認できた。

３．職業的アイデンティティと青年期のアイデンティティとは有意な相関関係を示した。また青年期のアイデンティティは、看護職へ傾倒や揺らぎなどの職業への意識傾向に影響されることが明らかになった。これは青年期のアイデンティティ形成において、５年一貫性以外の高校生や大学生よりも職業が強く関連することが推察された。

４．職業的アイデンティティでは、早期に看護職になると決めた群と自分の意志で５年一貫校入学を決めたという群が、有意にアイデンティティが形成されていた。

謝辞

調査の場を与ええてくださいました５年一貫校と、貴重な時間を割いて調査にご協力くださいました教職員と生徒の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

安藤詳子・内海滉（1995）：看護学生の自我同一性に関する研究―職業的同一性形成を規定する教育的要因―，日本看護研究学会雑誌 18，7-19.

上田伊佐子，近藤春江，山本美佐子，高木彩，宮野三奈，山西瑞実（2010）：５年一貫課程の看護学生の職業的アイデンティティの経年的変化と臨地実習が与える影響，看護教育 51，702-707.

江口瞳・寺澤孝文（2006）：看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化，日本看護研究学会雑誌 29，71-80.

江口瞳，片山はるみ，寺澤孝文（2011）：入学初期の看護大学生が抱く看護師イメージの構造と職業的 アイデンティティとの関連，山陽看護学研究会誌 1，21-30.

岡本祐子・松下美知子（1994）：女性のためのライフサイクル心理学，福村出版，108.
小沢一仁（2002）：学び支援の自己理解教育実践「大学生の心理学」を居場所及びアイデンティティの視点から捉える，京都大学高等教育研究 8，59-74.
落合のり子・堤雅雄（1997）：青年期のアイデンティティと自己認知―看護学生に対する調査を通して―，島根大学教育学部紀要 31，21-40.
風岡たま代（2005）：看護学生の共感性に関する一考察―職業的同一性との関係―，聖隷クリストファー大学看護学部紀要 13，15-26.
上山和子（2009）：看護基礎教育課程修了時の職業的アイデンティティ形成に関する研究―専門職としての意識―，インターナショナルnursing care research 8，55-62.
合田友美，黒田祐子，小籔知子，新見明子（2011）：看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関連から考える教育的支援，川崎医療短期大学紀要 31，75-81.
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）：児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について
http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf（アクセス日　2017年６月28日）
小藪智子，黒田裕子，合田友美，新見明子（2007）：看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第二報）―経年変化から考える教育的支援―，川崎医療短期大学紀要 27，25-29.
下山晴彦（1986）：大学生の職業未決定の研究，教育心理学研究 34，20-30.
下山晴彦（1992）：大学生のモラトリアムの下位分類の研究―アイデンティティの発達との関連で―，教育心理学研究 40，121-129.
新谷喜恵，内田真紀，能戸昭子（2006）：高等学校衛生看護科生の職業的同一性の形成過程，日本看護学会 16，97-105.
関口恵子（2012）：３年課程の看護学生におけるアイデンティティの形成―職業的アイデンティティとの関連に注目して―，埼玉医科大学短期大学紀要 23，31-43.
鑪幹八郎（2002）：アイデンティティとライフサイクル論，ナカニシヤ出版，207-209.
竹本由香里（2008）：看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討，宮城大学看護学部紀要11，13-20.
谷冬彦（2001）：青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―，教育心理学研究 49，265-273.
中西信夫，水野正憲，古市裕一，佐方哲彦（1985）：アイデンティティの心理，有斐閣選書.
中西信夫（1989）：人間形成の心理学，ナカニシヤ出版.
波多野梗子・小野寺杜紀（1993）：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化，日本看護研究学会雑誌 16，21-28.
東清和，津本信博，安達智子（2002）：現代青年の進路意識―概念の整理と大学生の傾向について―，早稲田教育評論 16，71-85.
本多洋子・落合幸子（2006）：医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み―進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討―，茨城県立医療大学紀要 11，45-54.
前田智香子（2009）：専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点，文学部心理学論集/関西大学文学部心理学会，5-14.
松下由美子・木村周（1993）：看護学生の職業的同一性形成を規定する要因の検討，教育相談研究 31，29-45.
松下由美子・木村周（1998）：新卒看護婦の職業的同一性とキャリア観との関連―入職オリエンテーション期における意識調査より―，産業カウンセリング研究 2，21-27.
三津橋佳子・関由起子（2016）：５年一貫看護師養成課程における生徒・学生の職業的アイデンティティ達成スタイルとその関連要因，埼玉大学紀要（教育学部）65，131-143.
宮下一博・爲川裕之（1991）：青年の職業に対する価値意識と自我同一性，千葉大学教育学部研究紀要

39，111-116.
室津史子，贄育子，重本津多子，今村美幸，藤原理恵子（2014）：看護学生の看護師に対するイメージおよびキャリアコミットメント―学年による比較―，ヒューマンケア研究学会誌 5，37-44.
森本文子（2008）：大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連，九州大学心理学研究 9，205-213.
文部科学省（2008）：高等学校の看護教育に関する検討会報告書～高等学校の看護教育の充実に向けて～. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/12/08121702/001.htm（アクセス日 2017年6月8日）
文部科学省（2016）：看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査. http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001161444（アクセス日2016年6月28日）
山内栄子，松本葉子，山本雅子（2009）：現代の看護系大学の学生生活における職業的アイデンティティの形成，日本看護学教育学会誌 18，11-24.
山田みき（2008）：進路選択に関する語りにみられる「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティ様態の特徴，広島大学大学院教育学研究科紀要 3，185-194.
若林満，水野智，佐野幸子（1990）：看護職キャリア発達―看護学校入学1年後における職業的環境認知の変化―，名古屋大学教育学部紀要 37，31-50. Erikson, EH（1959）：西平直，中島由恵訳（2011）アイデンティティとライフサイクル，誠信書房.
Kroger, J（1947）：榎本博明訳（2005）アイデンティティの発達，北大路書房，p58-61.

（2017年3月21日提出）
（2017年4月17日受理）

Formation Process of Professional Identity and Adolescent Identity Among Nursing Students in a Five-Year Consecutive Training Course

MITSUHASHI, Yoshiko
Saitama Prefectural Tokiwa High School

SEKI, Yukiko
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This study explores factors related to the process of formulating a professional nursing identity among student nurses who were enrolled in a five-year consecutive training course at a nursing high school and advanced coursed high school. Data were collected from 391 student nurses in the first to fifth years of the program, aged 15 to 20 years old, in March 2014. The students were asked to fill out a questionnaire, including a professional nursing identity test, three occupational identity status tests (wavering and hesitation about becoming a nurse, confidence and commitment in selecting the occupation of nurse, and being qualification-oriented), an adolescent identity test, and questions about demographic variables. The Pearson correlation coefficient showed professional nursing identity had a statistically significant correlation with adolescent identity. A multivariate analysis of variance revealed that the professional nursing identity score, like the adolescent identity score, decreased in the second, third, and fourth years, and then significantly increased again in the fifth year. The same score changes were seen in wavering and hesitation about becoming a nurse. Moreover, professional nursing identity, not adolescent identity, was significantly stronger among those who had decided to become nurses after age 13 compared to those who had decided to become nurses when they were 13 years old or younger. It was concluded that for fifth-year students, there were relationships among professional nursing identity, adolescent identity, and earlier self-determination to become a nurse. Further studies are needed in order to explore what type of educational support can enhance students' professional nursing identity.

Keywords: professional identity, adolescent Identity, nursing education, five-year consecutive nursing course,